8/17 朝福

語り継ぐ 2016 ふくい ⑤

# 自問胸に31文字紡ぐ

## 紺野 万里さん(68)＝福井市

「文月なかば人類初の核実験　葉月の日本を風が襲ひき」

福井市在住の歌人紺野万里さん(六八)の作品には、一九四五(昭和二十)年に広島、長崎を襲った原爆を詠んだ歌が少なくない。自身と切り離せないテーマだからだ。

「宇品港岸壁に立つ若き父を倒しぬ　八月六日の風が」

父の布施田広義さん＝享年(八二)＝は広島市内の陸軍の無線修理工場に勤めていた四五年八月六日、爆心地から四・五キロ離れた宇品港で、強烈な閃光と爆風を浴びた。とっさに岸壁に係留された小舟に避難。岸に上がると、多数の人が血を流して苦しんでいた。

非常招集を受け、無数の遺体が散乱する焼け跡で負傷者の救出活動に当たった。終戦後、両親が疎開する大野市に戻り、間もなく結婚。長女の紺野さんを授かった。

県警に就職した父から紺野さんは、被爆体験の話をよく聞いた。「助けに行っても助けられなかったことが悔しかったのだと思う」と紺野さん。父は退職後の八六年に被爆体験記を出版。県原爆被害者団体協議会の会長も務め、九五年には広島、長崎で被爆した県内在住者の証言集をまとめた。

父の遺影の前で生前に聞いた被爆体験や歌人としての思いを語る紺野万里さん＝福井市内で

紺野さんは父が被爆体験を公にし、平和を訴え続けた当時の心境を後に出版した歌集のあとがきでこう述べている。

「戦後すぐに生まれた私も、あらためて自分の中の広島を突きつけられ、次の世代を送り出したことの責任を考え続ける日々でした」(歌集「星状六花」)

二度の被爆を体験した日本で戦後生まれの私たちはなぜ、これだけ原発の立地を許してしまったのか―。七八年に長男を出産し、九二年に本格的に短歌を始めた紺野さんの自問は、九五年に起きた高速増殖原型炉「もんじゅ」(敦賀市)のナトリウム漏れ事故でより深まった。

「角鹿なる半島に二体おはします菩薩よいかなる如来に仕ふる」

これら三十首をまとめた連作「冥王に逢ふ―返歌」で二〇〇〇年、短歌研究新人賞を受賞。昨年発表した歌集「雪とラトビア＊蒼のかなたに」には、福島の原発事故をめぐる作品も数多く収録した。

父の被爆が創作の原点にある紺野さんだが、歌を反核のスローガンにするつもりはない。若い人の命を危険にさらす時代にしてしまった自分たちの世代にも責任があると感じているからだ。「ただ反対と言って自分は無実というような顔をしてはいけない」。これからも自問を胸に、静かに三十一文字を紡いでいく。

(平野誠也)

＝終わり